

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会
編集人 同窓会会報編集委員会
印刷 常陽新聞新社



海外研修旅行 (ケネディ宇宙センター)

土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎楠馬 作曲

- 一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水
- 二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声訝えて 湖心に澄むや月の影
- 三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり
- 四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

2面	会長あいさつ
2面	学校長あいさつ
3面	新任教頭・事務室長紹介
3面	平成22年度総会報告
4面	卒業60周年記念同窓会
4面	卒業50周年記念同窓会
4面	卒業40周年記念同窓会
4面	卒業25周年記念同窓会
4面	卒業15周年記念同窓会
5面	先輩を訪ねて
6面	卒業生レポート
7面	支部会・同期会だより
7面	定時制部会だより
8面	特集(校歌)
9面	母校だより
10面	職員室だより
11面	進路状況報告
12面	平成21年度決算報告等

同窓会会長あいさつ

幡谷 浩 史 (高4卒)



近年まれなこの夏の酷暑を経た所為か、なにか安定した季節という感じの昨今ですが、同窓会員の皆様にはいかがが経過してございませうか。

さて、進修同窓会会報は、会員同士のコミュニケーションをはかる上でも、相互の連携を深める上でも、同窓会にとって最も重要なツールとなっておりますが、そのために欠かせないのが、会報の届け先である会員の皆様の居所の確認であります。

このところ、名簿刊行の回を追って、名簿住所欄に記載のない方が漸増しているのが現況です。

前回の『進修同窓会会員名簿』は去る二〇〇七年に刊行されましたが、同窓会規約第十七条により五年ごとの刊行となっております。次回刊行が二年後に追っております。

前年名簿ご購入の方は、この機会にお手持ちの名簿をお開きいただき、同期の級友あるいはお知り合いの居所欄空白の方につきまして、もしこ

連絡がとりただけで済ませようとして、お一人でも多く居所をあかしてくださるようお願いできれば幸いです。

居所が判明した場合にはお手数ながら同窓会本部宛ご連絡をお願いいたします。

いわゆる「個人情報保護」もからみ、居所記載をめぐってはむずかしい問題もありませんが、何となく問題が会員から提示されて、名簿への居所記載を控えたいというようなお申し出がございました場合にも、同窓会本部宛ご連絡・ご相談いただくようお願いいたします。

なお、同窓会本部事務局は、原則毎週火曜日(除休日)に母校に詰めしております。母校の電話番号等につきましては『同窓会会報』最終ページでご確認願います。

最後に、前号とも重複しますが、進修同窓会としては在校生がより勉学に励むことができるよう、よりよい学習環境の構築をモットーとして、皆様から同窓会費としてご協力いただきました貴重な財源の最優先使途とする所存でございます。

同窓諸兄弟のご発展と、在校生が自信と誇りを持ち、品格ある人間形成と高い目標を目指して邁進されることを願ってやみません。

同窓会のご支援に感謝しつつ

学校長 市村 仁



進修同窓会会員の皆様にはご健勝にて活躍の事とお喜び申し上げます。また、日頃の在校生に対する格別のご支援ご協力に対し、心から御礼を申し上げます。

さて、在校生も、卒業生の皆様の活躍に少しも近づくと、日々の授業はもとより、ほとんど全ての生徒が、部活にそして三大行事の実行委員会に関わる等、積極的な高校生を送っております。

その成果の一つとして、まず進路面ですが、この三月の結果では、東京大学の二十四名、筑波大学の四十二名をはじめ、一定の評価をいただける合格者数を出せたのではないかと思います。

また、部活動でも、八割以上の生徒が参加する中、水泳部、弦楽部、囲碁部が全国大会に出場するなど、活躍を見せてくれました。そして、三大行事の実行委員会にも、二割近い生徒が自主的に参画し、レベルの高い企画力・運営力を見せてきています。

中でも、一高祭では、生徒をはじめ、ご来場いただきました五千三百名に上る方々にもご満足いただけた内容ではなかったかと思っております。

これら在校生の活動を、まさしく物心両面で支えて頂いている同窓会の皆様のご支援に改めて御礼を申し

上げるところであります。

特に昨年度、初めて実施を致しました生徒の「海外研修」に対しましては、年度途中のお願いにも拘わらず、引率教員三名分の旅費、百二十万円のご援助を「快諾」頂きました。このご援助は「海外研修」実施の可否を握るものでありましただけに、我々にとりまして大変心強いものであります。

また、この研修では、ハーバード大学・MITで、ワシントン日本大使館で、そしてフロリダで、同窓生の皆様の絶大なご協力があり、当初の予定を上回る成果を上げることが出来ました。

この事こそが、この事業を成功させた一番の力であり、在校生共々、改めて先輩の皆様の実感させて頂いたところだと思います。

また世界の第一線で活躍する先輩の姿は、在校生への最高のメッセージとなりました。参加生徒三十八名は、この海外研修を通して、極めて多くのものを感じ、そして貴重な体験をさせて頂きました。

必ずや、生徒一人ひとりの今後の生活に生かされるものと信じている

ところで、

また、今年度は、例年の生徒奨励費、生徒活動補助費、併せて二百万円に加えて、百七十万円の生徒活動特別補助費をヨット購入のためにご援助いただきました。

ヨット部は、本校の中でも極めて長い歴史と輝かしい実績を持つ部であります。ここ数年の関東大会に加えて昨年度は、全国大会、国体にも出場いたしました。

土浦・霞ヶ浦という土地柄にふさわしい部活動でもありますので、ご購入頂きました新艇を有効に活用し、ヨット部の活動を支えて参りたいと考えております。

本校は、今年創立百十四年目を迎えます。多くの卒業生の皆様の地道な努力により創られた歴史と伝統であります。

今年も八月、学校説明会を実施し、約千名の中学生と保護者の方々に参加をいただきました。

これらの方々への期待に応えるためにも、また、卒業生の皆様の思いを受け継ぎ、新たな歴史と伝統を創っていくためにも、公立高校として何が出来るか、どこまで出来るかの挑戦を続けていきたいと考えております。

進修同窓会会員の皆様には、今後とも、忌憚のないご助言と併せて、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新任職員紹介

全日制教頭 稲葉 裕一



今年度4月より全日制教頭を勤めさせて頂いている稲葉です。何事にも積極的に取り組みする生徒、それを支える教職員に感謝する日々を送っています。よろしくお願いたします。

事務室長 菊池 正樹



進修同窓会の会計を仰せつかりました菊池です。微力ながら事務局の努めを果たしてまいります。

よろしくお願いたします。

平成二十二年度 進修同窓会総会開かれる

去る4月11日(日)、平成22年度定期総会が、母校土浦一高体育館に於いて会員多数出席のもと盛大に開催されました。

総会は、恒例となった応援指導部のリードで吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会し、物故会員への黙祷の後、会長・学校長の挨拶があり、長瀬宗男副会長の議長により以下の議案が審議され可決承認されました。

- 一 第一号議案 平成21年度事業報告及び決算報告
 - 二 第二号議案 同窓会役員改選
 - 三 第三号議案 同窓会規約の改正及び旧本館改修促進委員会の設置
 - 四 第四号議案 平成22年度事業計画(案)及び予算(案)
- (12ページに決算予算書掲載)
会長から本部役員退任者へ感謝状が



応援指導部のリードで総会開会

贈呈され総会が開会しました。

総会後 卒業周年祝賀式に移り、中49・高2回(60周年)、高12・定10回(50周年)、高22・定10回(40周年)、高37・高理14・定31回(25周年)に、高47・高理24・定45回(15周年)を規約改正し、加えてお招きいたしました。

高13回の三輪志郎氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、高12回の瀧ヶ崎洋之氏より、本年卒業周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。

最後に21年度から同窓会会計で助成された生徒海外研修について、映像を交えて研修報告がありました。(詳細は、土浦一高HPを)又、会場を移動しての祝賀会にも数多くの方々の参加があり、往時を懐かしむので交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。



祝賀式での瀧ヶ崎氏謝辞

「卒業還暦」を迎えて

土浦一高二会六十周年記念祝賀会

四月十一日「平成二十二年度進修同窓会総会並びに卒業周年記念祝賀会」に出席し、卒業後六十年という節目の日を迎える感慨と、母校に呼ばれるのはこれが最後かなという一抹の感しさを、高二会同窓生一同しみじみと感じました。私達は県立土浦中学校へ入学したのは昭和十九年の戦況厳しい時でした。一億総動員の時代で学業より軍事教練や勤務奉仕に汗してはげんでいたことを覚えて、二年生になると戦局急を告げ、平常の授業は皆無に等しく、六月には「動員令」により第一海軍航空廠(阿見)へ行くこととなりました。やがて敗戦により戦後の苦しい生活が始まりました。占領下のまだ世情混沌とした時代の昭和二十五年(1950年)の春に卒業を迎えたのです。その間私達は二十三年の学制改革に伴い新制高校の二年に編入されました。それで旧制中学四十九回卒(七九名)と新制高校二回卒(二三二名)計三一名が同窓生となる訳です。中学から高校の六年間を過ごしたのは、一年先輩の方々と一年後輩の方々と、母校の歴史の変革期に在籍していたのです。

当時を振り返ると、戦中戦後を通しての同窓生との交わりの数々の思い出があります。それと個性豊かな数多くの先生方との触れ合いの数々は枚挙に暇がなく忘れることが出来ません。これらの同窓生や先生方との交流の事柄が我々の血肉となつて私達の現在があるのだと思つています。私達の卒業後の生活の様式は、土浦中学・土浦一高での経験が起点となつているものと思えます。

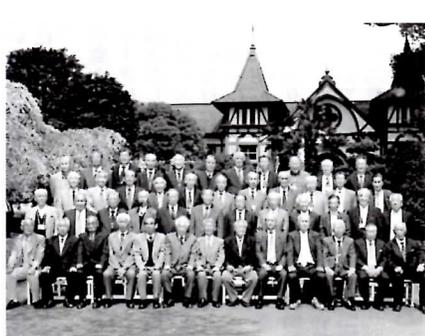
卒業した昭和二十五年(1950)六月、北朝鮮軍が38度線を南進し朝鮮戦争が勃発しました。米軍の兵站基地の日本では、軍事物資の需要が増大していわゆる「朝鮮特需」が起こり日本経済は一気に活況を呈して戦後復興の機運が高まりました。あれから六十年が経りました。私達にとつては「卒業還暦」の年に当たります。私達は卒業後、進学・就職・結婚そして夫れ夫れの社会生活を過ごしその中で戦

後の復興の一翼を担ってきたのだと自負しています。

今年平成二十二年。だんだん昭和の記憶が薄らいできた今日この頃です。俳人の中村草田男が「降る雪や明治は遠くなりにけり」と詠んだのは、昭和六年(1931)で、明治から約二十年が過ぎた年で満州事変が起きた年です。この年に私達は生まれました。七年(1932)に五・一五事件発生、八年(1933)に国際連盟脱退、十一年(1936)に二・二六事件、十二年(1937)に日中戦争、十六年(1941)にあの太平洋戦争に突入。私達は軍部支配による軍事色に覆われた幼少時代を送りました。そして終戦後の混乱期、復興期を目の当たりにして今日に至りました。とても「昭和は遠くなりにけり」という気持ちにはなれません。今年昭和で数えるとはなれませんが、まだまだ私の心の中では続いている昭和です。卒業六十周年にあたりこの念いを深くしている昨今です。

今回の総会に当たり、高二会・土浦部会及び筑波山会の有志が集い、一八〇名に案内状を発送。出欠返信一二〇通、同窓会前後(筑波山ホテル青木屋)参加者三六名・総会参加者四八名・ホテル観光での祝賀会への参加者二七名、大いに懐旧を暖めることが出来ました。

この席上、誰からともなく「六十五年同窓会もやろう」という声があり、満場一致の賛同を得ました。今後は高二



卒業五十周年記念同窓会

会・土浦部会を核として計画を進めることを約して散会しました。素晴らしい六〇周年記念同窓会でした。有り難うございました。(高二会・土浦部会 小野 廣)

去る四月十一日の正午過ぎ、思い出深い桜花に惹きつけられるように、母校の玄関前に集合しました。参集した同窓は105名。久しぶりに談笑を交わしながら、今は重要文化財という本館をバックに記念撮影。そして、体育館での同窓会総会と卒業周年記念祝賀式に臨みましたが、卒業六十周年の大先輩方の後ろに席を頂き、改めて50年という歳月の重みをひしひしと感じる一時でもありました。

この記念すべき日をより有意義なものにするため、私たちは、「十一回卒の先輩に続け」とばかりに、『卒業五十周年記念誌』(文集)を発行することにいたしました。半世紀にわたる自らの人生を改めて振り返り、今ある自分にも目を向けてみ

4面へ続く



3面からの続き
ようというわけです。

各クラスから1、2名の編集委員を選んで、原稿集めから始めましたが、現役を退いて長い年月を経過した同窓も多く、はじめはとも一冊の文集にはなりそうも無いと、編集委員の努力もあり、百名ほどから原稿が寄せられ、恩師三人の寄稿も頂いて、立派な記念誌が完成しました。「古稀回想」とも言うべき文章の数々は、まさに青春真っ只中の一高健児の姿を髣髴とさせ、仕事に全力投球した情熱と誇り、仲間や家族とのふれあいや一途な思いなど、様々な人生模様を凝縮されており、また、知られざる一面を新発見することも出来て、すばらしい文集になりました。私たちにとっては、何と言っても昭和三十三年夏の甲子園出場は忘れられない思い出として今でも記憶の中に色濃く残っているのも事実です。

高22回卒業四十周年記念同窓会
今夏は九月迎えた今日も、八月と同じく、いやそれ以上にうだるような激烈的な猛暑が続いています。日本は灼熱列島になつてしまいました。
去る四月十日(土曜日)、私たち高22回

生は、卒業40周年記念の同窓会を土浦市のホテルマロウド筑波において百名ほどの参加を得て開催しました。クラスごとに受付が行われ、懐かしい顔に15年、中には40年ぶりに会うことができました。続いて記念写真に会うことが始まりました。すぐに恩師の先生方の紹介。矢口四郎先生、朝賀定良先生、青山和義先生、小田潤先生、大曾根宏先生にご出席を賜りました。深くお礼申し上げます。残念ながら体調がすぐれずご専断を拝することができなかつた先生方とは次回お会いしたいと存じます。物故者への黙祷。還暦が目の前に迫ってきた我々も人の世の無常という摂理にありました。全員短い時間ではありましたが、衷心より哀悼の誠を捧げました。クラスごとの自己紹介。A組から順に全員でステージに登り、ひとりひとりの自己紹介に驚きや賛嘆の声が上がり、59年の歳月が我々同窓の一人一人の人生に刻印したものに、ただただ驚き思いを深めるばかりでした。さらに真打ちとして恩師の先生方にご挨拶を頂きました。その間テーブル席では、お互いの近況などで話がどんどん盛り上がり旧交を大いに



温めることができました。あつという間に3時間が過ぎ、全員で沃野一望の校歌を歌い、再会を期し散会となりました。その後思い思いにクラスごとの二次会がありました。明るく四月十一日(日曜日)母校の体育館での進修同窓会総会、卒業60・50・40・25・15周年祝賀式、ホテルCANOKO(旧霞ヶ浦観光ホテル)での祝賀会(懇親会)にも参加し長い2日間に暮を降ろしました。この同窓会を開くため大変な労を取つてくださった各クラスの幹事諸氏、本当にお世話になりました。ありがとうございました。また、貴重な機会をお与えくださった進修同窓会に心より感謝申し上げますと共に母校のますますの発展を祈念いたします。(高22回卒 松浦安弘)

笑顔一杯の卒後25周年記念同窓会

平成22年4月10日、150名の笑顔が霞ヶ浦観光ホテルに集まりました。25年ぶりの再会で、外見は顔もわからない者、高校時代とほとんど変わらない者様々でしたが、久しぶりに顔を合わせるものがほとんどで、受付は大賑わいとなりました。お世話になった恩師も多数お越しいただき、ホテル前で撮影した全体集合写真は笑顔、笑顔の素晴らしい記念写真となりました。渡辺聡君司会のもと会は始まり、恩師の先生方ご入場、代表幹事・島田恵一君の挨拶、学年主任・原先生のご挨拶、乾杯、開宴と続く中で、同窓会は大いに盛り上がりました。各クラスの出席者を壇上にあげ、担任の先生方にスピーチをいただきましたが、それぞれ懐かしく楽しい話を沢山いただきました。近況を話し合うもの、昔話に花が咲くもの、会場内も笑顔であふれかえり、あつという間の2時間でした。

会場内外の笑顔眺めると、準備の苦労も忘れ、楽しい時を過ごさせていただけました。連絡先調査から当日の進行まで、力を貸してくださった各クラス幹事の皆様に、あらためて心より感謝を申し上げます。最後に、スピーチをさせ

ていただく機会をいただきました。同窓生に伝えられたことを以下に記します。「卒業をして、進修同窓会3万人のネットワークに自分を加えていただけたことに感謝をしています。先輩・同輩・後輩の皆様公私共にお世話になり、生かされていく自分に気がつきました。同窓という素晴らしい関係を大いに活用して、それぞれの人生に生かしていきたいように。」25年ぶりの「再会が新しい交友関係の再開」となることを祈念し、関係者各位に感謝して、高37回 高理14回卒後25周年記念同窓会の報告いたします。(高37回卒 大久保 博)

卒業15周年記念同窓会

去る四月十一日、私たち普通科47回および理数科24回卒業生は、卒業15周年記念の祝賀会、同窓会を開催させていただきました。祝賀会には各周年記念の先輩方と母校体育館にて行われました。同窓生が集まるとあちこちから歓声が上がり、それぞれ思い出話に花を咲かせていま



今回の15周年記念同窓会は、昨年からの新しい試みで、同窓会活動の活性化のためにはじめられました。しかし実際に幹事として仕事してみても、住所録で連絡がついた方が同窓生の3分の1程度にとどまり、連絡先の確認もなかなか進まないという状態でした。友人から友人へと連絡を回してもらい、どうにか開催にこぎつきました。この15年という歳月は、大学生から社会人へとそれぞれの生活が大きく変化する時期にあたり、どうしても疎遠になってしまうのかもしれない。そうした中で50数名もの参加者が集まってくれたのは、ひとまず成功と言ってくれたいと喜んでいきます。また、更なる活動を要望する声もいただき、現在は来年1月の同窓会開催を計画中です。少しずつですが同窓生の連絡先も判明し、徐々にその輪を広げていきたいと考えています。

祝賀会後は会場をホテルCANOKOに移し、学年同窓会を行いました。こちらでは恩師の先生方も多数ご参加いただき、花束贈呈の後、一言ずつスピーチをいただきました。学年主任の高橋先生、副主任の松井先生のお話は、往時を偲ばせるような含著のあるもので、担任の先生方も、それぞれが当時のままの個性的なお話をしてくださり、まるで15年前の校舎に戻つたような錯覚をおぼえました。明るく賑やかな懇談の中で、予定時間を大幅に延長しての閉会となりました。

高橋先生が私たちの卒業式で、「君たちの未来は明るい」とはなむけの言葉を下さつてから、早くも15年。当時ともに学んだ同窓生が、それぞれの分野で活躍なさつていくことを知りました。みなさまが当時と変わらない面影のまま、これからも社会の第一線で活動されることを祈っております。最後になりますが、今回このような機会がなければ、同窓会を開催することはなかったかもしれません。祝賀会に招待して下さった同窓会事務局の皆様へ感謝申し上げます。そして支えていただいた諸先生方、諸先輩方に合わせて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。(高47回卒業生 土屋太祐)

先輩を訪ねて

①

茨城県信用組合理事長

幡谷 祐一氏 (旧中40回昭和十六年卒)

進修同窓会会長在職 平成三年四月～平成十九年四月



茨城県立土浦第一高等学校元同窓会長幡谷祐一氏は、平成22年3月25日、筑波大学院生命環境科学研究所を修了し、博士(学術)号を取得されました。

高齢にもかかわらず若い学生達にまじっての学業成果に、「筑波大、86歳の博士号」「経済界重鎮孫世代と研究」「86歳最高齢で博士号取得」と日経、読売、朝日等の新聞が報じました。

同窓会の皆さんは、ご存じのことと思いますが、幡谷氏は、現役で1兆円以上の預金を預かる日本一大きい信用組合の陣頭指揮を取り、各方面で茨城県の発展に多大な貢献をしております。特に、「次代を担う人材を応援」ということで、昭和50年には「財団法人茨城県信育英会」を設立し、毎年高校生40名に、返還の必要のない学資援助を行っています。また、昭和59年度には「幡谷教育振興財団」を結成し、県内の小中学校の中から理科教育優秀校に助成金として、毎

年6校に各百万円を贈呈しております。更に、「けんしん天体研修館」に、プラネタリウムを設置したり、スポーツ支援、多くの地域振興の支援を行っています。平成20年4月29日には、茨城県中小企業団体中央会会長として中小企業振興に尽力した功績により、勳章「旭日中綬章」、同年7月には警察協力賞、10月には紺綬褒賞を受賞しております。

幡谷氏は大正12年、醤油醸造業を営む父「仙三郎」、母「なを」の長男として小川町に生を受けました。「父は常に私の尊敬の的でした。特に15の訓戒は「仙三郎遺訓」として座右に置き、活動の銘としています。母親は、優しく、4男4女を育てながら家事ばかりでなく3000坪程の畑を耕し、花や野菜を育てる働き者でした。」と話される程に両親の姿は幡谷氏の心に焼き付いており、現在の活動の支えになっておられます。

幼年時代は、父の「文武両道」の教えに従い、勉強に剣道に励み、小学校6年生の時には県大会で優勝する程の上達ぶりでした。その後、土浦中学校を受験、見事合格しました。土浦に下宿しながら勉学に励み、日本大学に進みました。時代は風雲急を告げており、予科2年の時に学徒動員で中部127部隊松田隊に入隊し、4カ月後に幹部候補生として仙台陸軍飛行学校で教育を受け見習い士官となりました。終戦は、水戸の陸軍電波兵

器練習所で迎えました。その後学業に戻り、日本大学法文学部を卒業、家業を継ぐことになりました。まず考えたことは、消費者に喜ばれる醤油をつくること。その勉強のために、大蔵省醸造試験場で1年間の研修を受けました。この戦中戦後の学びがその後の人生への取り組み方を決定づけたそうです。以来10年間醤油醸造に従事しました。次に昭和30年自動車関連事業に進出しました。まだ自家用車が珍しい時代に、先を見越した事業展開は事業家としての手腕の開花といえます。

昭和41年、父仙三郎が設立した茨城県商工信用組合(現茨城県信用組合)の非常勤理事、昭和47年常務理事、昭和62年理事長に就任、以来今日まで現役の理事長として、創業者・父仙三郎翁の遺訓を守り、安全第一、奉仕第二、収益第三、を経営の信条として、「元元(ごごご)つ」をモットーに、率先垂範し、地域の信用組合としては破格の1兆円を超える預金を預かる銀行並の信用組合に育てあげました。

幡谷氏が常に口にする言葉に「少しして學べば壮にして為すあり、壮にして學べば老いて衰えず、老いて學べば死して朽ちず」があります。幡谷氏は常に学び続けています。お話しを伺っていると、論語や言志録の言葉が続々と出てきます。

県信の応接室には、多くの標語が貼られています。「以身作則」「徳者事業之基」など人間として守るべきこと、営業で守るべき基本が並べられています。全国信用協同組合連合会会長、茨城県行財政改革推進懇談会会長と要職にあり、茨城県でも1、2を争う忙しい身でいつ勉強しているのかと伺うと、「夕食後自室で本を読むことです。」と返って来ました。古希から始めたという「平成自由詩」(漢詩の約束事から離れた詩)第一

巻には

獨學

韋編三絶 漢詩集

紙面逾百 吾目驚

日夜携帶 作詩忙

苦吟發想 益腦漿

という詩があります。韋編三絶(書物を何回も繰り返し読むさま)を実践なされているのです。県信では毎朝、始業前に役員・部長が顔を揃え、読書会を行っているそうです。「本を読み新しい知識を吸収していくことは、企業人として、また一人の人間として大きく成長していくために欠かせないものです。」との氏の考えにより現在も続いております。読書の一冊に「ガイアの復讐」(ジェームズ・ラブロック著)があり、この本の中で「地球は、そのものが巨大生命体であり、微生物、動物、植物、ヒト、大気、海、岩石等すべてが地球環境を保つために調和している。」というガイア仮説に衝撃を受けました。環境問題は人類の課題であり、もっと専門的に学びたいという意欲が沸き上がって来たそうです。そこで、筑波大学大学院生命環境科学研究科博士後期課程に社会人特別選抜枠を受験、見事合格しました。筑波大学大学院の入学式は平成19年4月の土浦一高の入学式当日でした。この時、幡谷氏は挨拶の中で「同窓会長を退任し、この後、筑波大学大学院の入学式に出席します。」と話され、新入生・保護者ともども、氏の勉強する意欲に感嘆の声を上げたそうです。それから3年間無欠席で、常に一番前の席で、孫世代の同級生と机を並べて学び通しました。大学院の研究テーマは「廃食用油の回収による地域環境及び社会経済への影響総合評価」でした。廃食用油から精製したバイオディーゼル燃料でバスを走らせました。廃食用油の回収、精製プラントの稼働、この燃料によ

るバスの運行を実施し「産学官共同のバイオディーゼル燃料プロジェクトの総合評価と技術的知見に関する研究」の博士論文を仕上げたそうです。廃食用油は2年半で3万2013リットルを回収、2万8800リットルの燃料を精製し、水戸市の公用バス等の走行に利用され、「15万キロ走行した、約76トンの二酸化炭素削減」になったとのこと。

この研究は、温室効果ガスの削減とともに、環境活動における企業の地域貢献に寄与するものとして、平成20年には環境活動賞、21年には環境活動賞特別賞を受賞されました。幡谷氏は環境活動賞特別賞を受賞したそうです。

幡谷氏は、「83歳から86歳の3年間の勉学で博士号が取得出来たのは、筑波大学の先生方、学生の皆さん、茨城県信用組合を始め多くの企業、水戸市の皆さんのご協力があつたからであり深く感謝しております。特に、健康面に気を使いつつ通学を支えてくれた家内に励まされました。」と述懐されました。幡谷氏は、100歳まで社会に尽くしたいと平成12年に「百歳宣言」をし、「百歳来之以徳」(百歳之来を来たすに徳を以てす)を掲げて日々、傘下の企業経営、社会貢献に動んでいます。これからも読書に励み、多くのことを学びたいと意欲的に述べられました。最後に「読書離れが危惧されていますが、若者は常に好奇心を持ち、暇を見つけて読書をしなさい。」と結ばれました。

9月の中旬、お忙しい中、時間を割いて茨城県信用組合本店で取材させていただきました。取材に当たった青山、富永、長瀬の3人共に大先輩のエネルギーに圧倒されました。

これからも健康に留意され、益々ご活躍なされることを願うと共に我々同窓生の鑑となつていただきたいと思います。

卒業生レポート

15

ハイテク企業の現場から

日本電子株式会社 代表取締役社長

栗原 権右衛門

高19回(昭和42年卒)



今年の5月、久しぶりに昭和42年卒3年G組の同窓会が恩師の中島節先生を囲み、霞ヶ浦に面したホテルで開かれました。還暦を越えた面々ではありますが、皆極めて元気で、遙か昔の懐かしい高校時代の思い出や、近況について話はずみ、これからは毎年開催しようということになりました。元気な同窓会が今後も末永く続くことを願っています。

同窓会後程なくして、中島先生から進修同窓会報への寄稿要請のお手紙をいただきました。長い歴史を誇る大変立派な同窓会報という思いが先にたち、少しためらいましたが、特に在校生や若い世代の卒業生に対し、何かヒントになるようなことが書ければと思い、筆を執らせていただいた次第です。私が土浦一高に入学したのは、国中が東京オリンピックで湧き立っていた1964年です。日本は高度成

長期の真つ只中にあり、それまでの1次産業中心の産業構造から2次、3次産業へのシフトが加速されて行つた時代でした。学校の近傍には工業団地が造成され、いくつかの大手メーカーの工場も建設され始めていました。あまり勉強もせず、自分の進路に確たる目標を定めていたわけではありませんでした。世の中が大きく変わりつつあることは子供心にも感じ取っていたように思いますが、産業構造の変化に伴い国際化が進展していたこともあり、いつしか海外で仕事をすることを夢みるようになりまして。1ドル360円の当時に外国へ行くことは夢のまた夢であり、まして海外で仕事をすることは一部のエリートビジネスマンに限られていました。なにしろ海外転勤の際には一族郎党が羽田空港に集まり、万歳三唱で見送った時代でしたから。商学部に進学してからは、英語や貿易実務などを少し真面目に勉強し始め、商社マンになるつもりでしたが、結局は今の会社である日本電子に入社することになりました。

日本電子は戦後間もない昭和24年に電子顕微鏡の開発会社として設立され、創業当時から世界市場で勝ち抜くことを社是にしていた会社で、輸出比率は70%に達し、世界的な研究者や科学者をユザイとして持つ

知る人ぞ知る会社として高い評価を勝ち得ていました。欧米の数多くの販売サービス拠点を現地法人化し、多くの日本人が駐在員として活躍していました。この会社に居れば海外で仕事をやる機会が間違いなく到来する筈でした。しかし入社した1971年にニクソンショックが起き、為替は変動相場制になり、会社も現地化が推進され、海外駐在員として活躍することは見果てぬ夢となったわけです。

その後は一貫して国内営業畑を歩んできましたが、ある意味で地味なここでの体験から私はその後の仕事のみならず、生きて行く上で重要な多くのことを学んだように思っています。営業の醍醐味は苦境を乗り越え受注を獲得することにあります。受注活動を通じて得た貴重な財産は、受注活動よりも、クレーム処理など後ろ向きな仕事への対応を通じて獲得したように思っています。受注した装置が納期に間に合わなかったり、事前の打ち合わせが不十分で、目論んだ性能が発揮できないことなど、予期しない問題にぶつかるとは少なくありません。お客様から、泣きながら怒られたこともあります。重要なことは決して逃げないことです。逆にトラブルがもとで顧客との信頼関係が一層深まり、次の受注につながることもよくあります。人生において問題やもめごとはつき物ですが、重要なことは逃げずに対処することだと思えます。

ずしもそうではありません。営業には人間的な魅力や勘や度胸が求められます。わが社の営業員の7割は文科系出身ですが、技術系出身者に負けずに頑張っています。出身大学の偏差値と営業力については更に面白いことが言えます。これはわが社に限ったことかもしれませんが、偏差値と営業力は全くと言ってよいほど相関しません。無名な地方大学出身者で優秀な成績を上げる者がいる反面、大学の看板通りの実力を発揮できないでいる人も多のです。土浦一高はもはや全国でもトップクラスの進学実績を誇る名だたる有名高校となり、卒業生である我々も鼻高々ではあります。全員が望みの大学に入れるわけではなく、希望の大学を目指し頑張ることは大切であり、それが叶わなくても諦める必要はありません。大学の偏差値は物差しの一つに過ぎず、社会に出た後では世の中を測る物差しが無数にあります。自分の適性が十全に発揮できる仕事を選ぶことが大事ではないでしょうか。

さて、このあたりで私の近況についてご報告申し上げたいと思います。私は一昨年の6月の株主総会で日本電子の社長に就任しました。会社の事業の性格上、歴代、技術開発出身者が社長になるケースが殆どでしたが、どういうわけか、文系で営業畑を歩んで来た私に御鉢が回ってきました。素人の強みなどと聞き直り、元気にスタートした筈でしたが、就任直後の秋に、米国のサブプライムローン問題に端を発した世界的な景気後退の影響で、大変厳しい就任一年目を迎えることを余儀なくされました。わが社は輸出比率が今でも5割以上を占めている為、円高の影響をもち

に受けていますが、当面円高デフレが沈静化する見込は薄く、人員減による労務費の削減、関係会社再編による経営効率化の推進など、言わば骨身を削る努力を継続しているところとです。しかし企業には縮小均衡という言葉はありませんので、同時に成長戦略を社内外に発信する為、中期経営計画を発表したところです。

日本経済はバブル崩壊後、未だに閉塞感を払拭できないでおり、日本の将来を悲観する見方が支配的です。しかし、日本の高度成長期と失われた20年を共に経験して来た団塊の世代に属する私には、現在の日本を戦後の成長の終焉とする見方でなく、これから50年の新しい成長の始まりの時と位置付けるべきかと思いがあります。わが社も昨年創立60周年を迎え、戦後日本の消長と軌を一にして事業を継続してきた会社ですが、社員には今こそ新しい成長の始まりの時と訴え、元氣付けています。

若い同窓生の皆さんも、就職難等で心配や苦勞が絶えないと思いが、これからは我々が新しい時代を切り開くのだと思いで、元氣を出して頑張っていたらと思います。

【略歴】
栗原 権右衛門(くりはら こんえもん)
現職 日本電子株式会社 代表取締役社長
生年月日 1948年5月27日生
最終学歴 1971年3月 明治大学 商学部 卒業
職歴 1971年4月 当社入社
1994年4月 筑波支店長
2000年4月 メディカル営業本部長
2002年6月 取締役兼メディカル営業本部長
2004年6月 常務取締役
2005年6月 専務取締役
2006年6月 取締役兼専務執行役員(営業担当)
2007年6月 代表取締役副社長執行役員
2008年6月 代表取締役社長 就任
現在に至るに
賞罰なし

支部・同期だより

真鍋支部



母校を擁する地元支部として長い歴史を持つ支部ですが、諸般の事情から、ここ十年近く休眠状態が続いておりました。そこで、去る十二月某日、有志相集い鳩首協議の結果、支部の再構築を目指して年度内に会員を糾合し、総会を開くことになりました。

総会は、二月二十七日午後十二時よりホテルマロウド筑波に於いて開催されました。本部から大曾根宏亮副会長、母校から市村仁校長先生のご臨席を仰ぎ、会員四十九名の出席のもと、新生真鍋支部の総会が肅々と進められました。

最初に荒井忠司支部長(高7回)の挨拶があり、続いて大曾根副会長から同窓会活動の現状を、市村校長先生からは学校の現状について詳細にご説明を頂きました。特に市村先生からは、昨年度末に

始めて実施された海外研修において、現地で活躍する同窓生の積極的な協力があった旨のお話があり、母校への熱い思いと強い絆で結ばれた進修同窓会への賛辞と感謝の言葉をいただきました。

続いて議事を進め、まず成島正芳幹事(定三回)から今総会にいたるまでの経過報告並びに会計報告があり、次いで規約改正、役員改選等予定された議案を原案通り可決承認し、新生真鍋支部が無事スタートいたしました。

総会終了後に行われた懇親会では、総会に引き続き小松崎忠雄幹事(高十四回)の名司会のもと、小野治(高九回)新支部長の挨拶に続き、飯村弘福間(高五回)のご発声により乾杯。一息入れた後、前支部長荒井忠司氏、並びに土浦市消防団長に就任された菊田宏氏(高十五回)の栄誉を称えてそれぞれに記念品を贈呈。続いて久松猛氏(高十四回)、海老原一郎氏(高二十四回)両市議会議員による市政報告会と続き、一連のセレモニーを通して、会員相互の絆、そして地域に対する熱い思いを共に分かち合うことが出来ました。

しばし交歓の時が流れ、会場が和んだ頃、司会の小松崎氏のリードにより、各テーブルごとに登壇。自己紹介の後、各自思い出や近況を語り合いました。皆それぞれに懐旧的な情抑え難く、制限時間を遥かに越えて熱弁を振るう会員が続出し、静かに幕を開けた懇親の宴は、久方ぶりの邂逅の時を楽しむ会員の熱気で、大いに盛り上がりました。

至福の時は瞬く間に過ぎ、尽きぬ思いを抱きつつ最後に近藤恒重氏(高理十三回)のリードで校歌を高らかに斉唱し、万歳三唱の後、次回の再会を約して散会しました。(事務局長 清水浩)

高52回卒同期会

「おお、お久しぶりー卒業アルバムと違いすぎだよー」

2010年がスタートしたばかりの一月二日、ホテルマロウド筑波。二百人の

熱気が会場からドアの外の受付まで伝わってきます。土浦一高を卒業してからちょうど十年。ドアの向こうでは、当時お世話になった先生方や同級生達が、あちこちで一高時代の思い出、仕事、結婚、子供の話で大盛り上がりです。

一高を卒業して十年周年を迎える2010年に非公式であるが学年全体の同窓会を自主的に開催しようと思いが思い立ちました。のはちようど一年前のお正月でした。あるクラスの同窓会で学年全体の同窓会を開催することを一人で宣言し、帰りの電車で会った同級生にはすでに宣伝を始めていました。核となる友人にメールで呼びかけ、早速バーチャルな事務局を結成しました。この十年間で驚異的に発達したインターネット、電子メールを駆使して活躍する同級生の存在を、かみ段階は、人づてというアナログな手段が頼りだったのですが、

十年間を振り返るにはあまりに短い三時間でしたが、高揚した雰囲気の中に懐かしさがありました。五年後、卒業15周年記念同窓会で、また一回り成長した姿に再会できることが、今から楽しみです。

2000年卒業生同窓会
幹事代表 小高 篤志

定時制部会だより

平成22年度定時制部会総会は、4月11日に定時制給食室に於いて行われました。今年度の周年記念祝賀の出席者は、部会役員の尽力にも拘らず卒業50周年の方々だけでした。因みにお名前は、紅一点大川真砂様、鎌田義治様、草薙宏明様、栗原和男様、塚田彬様、中村岩夫様、菱沼



金澤孝久氏(定10回)の作品
「悠久の時」(ウエネットア)

泰助様以上、錚々たる顔ぶれが揃い定時制部会に対する支援も力強いものを感じました。

さらに「カンコー」の祝宴の後、二次会で同じ卒業50周年の金澤孝久様(昭和36年卒)に45年ぶりに再会でき、高校生の時絵画(デッサン)の指導をして頂いたお礼を言う事が出来ました。

先輩はご承知のとおり武蔵野美術大学の講師をされた画家で、昨年12月に日本橋三越本店で個展を開かれました。(イタリア世界遺産を描く)

また、国立西洋美術館での講演や作品が人気テレビドラマでの重要なシーンで使用される等、多岐にわたり活躍中です。さて、今回卒業15周年、25周年、40周年の方が参加されなかった事は甚だ残念で、卒業生が20名以下で半数が住所不明という状況でした。「幹事役の方だけでも・・・」とお願ひしたのですが力不足を痛感しています。

終りになりましたが、定時制部同窓会総会も市村校長先生、井坂教頭先生はじめ職員方部会役員の皆様方のご協力を賜り、無事終えられました事、深く感謝申し上げます。

土浦一高定時制部会 会長 武石進

平成二十三年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

- 一、期日 平成二十三年四月十日(日) 午後一時
- 二、会場 土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

- 卒業六十周年 高十三回 定十一回
- 卒業五十周年 高二十三回 定二十一回
- 卒業四十周年 高三十三回 定三十一回
- 卒業三十周年 高三十三回 定三十一回
- 卒業二十五周年 高三十三回 定三十一回
- 卒業二十周年 高三十三回 定三十一回
- 卒業十五周年 高四十八回 定四十六回

一般会員・周年記念会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。



特集・校歌を考える

本校の校歌制定

誕生直後の校歌（「進修」第14号に掲載）↓

一 沃野一畝數百里
 そり立ちたり筑波山
 漢へて寄する瀧波は

二 春の彌生は櫻川
 流に浮ぶ花筏
 渡る雁聲芥えて

三 此の山水の美を享けて
 此の秀靈の氣を享けて
 東國男兒の氣を享けて

四 筑波の山のいや高く
 嗚呼櫻水の旗立てて
 龜城五百の健男兒

關八州の重鎮として
 空の碧をさながらに
 終古渝らぬ霞浦の水

其の源の香を載せて
 蘆の枯葉に秋立てば
 湖心に澄むや月の影

我に寛雅の度量あり
 我に至誠の精神あり
 我に武勇の氣魂あり

霞ヶ浦のいや廣く
 我 校風を輝かせ
 龜城五百の健男兒

おめでとう！我々の校歌ができて来年で100年が経つ。こんなめでたいことがあるのか。お互いに、すこした人生を思ったことがあったであろうか。

学び舎の青春を歌う本校の校歌は、一番で筑波や霞ヶ浦の雄姿を、二番では、郷土の美しい季節の移ろいを、三番で、この素晴らしい風土に培われる若人の心意気を、そして最後の四番で、この学び舎での青春を、誇らかに歌い上げています。

明治初中期に創立した旧制中学校では、校章は創立期に制定されているが、校歌は創立後相当の年月が経ってから制定された学校が多いようだ。

茨城県内をみると、水戸中学では明治41年に作られている。また、下妻中学・

上があった。

堀越晋は、石岡市井関の出身で成績は上位であったものの、校内ではあまり目立った存在ではなかった。しかも、5年生ではなく、4年生の堀越の作品が入選したことて全校生徒は驚きの念で迎えた

水海道中学では明治43年に作られている。その下妻中学では、旧制一高寮歌「嗚呼、玉杯に花うけて」の曲にのせて、生徒たちの間で自然と歌われ続けていくうちに校歌として認知されていったという。これらは明治40年代に作られている。

本校では、明治44年1月1日、校歌の発表があった。午前9時からの四方拜の儀式に次いでのことだった。前年7月、夏休みを前にして、全校生徒に校歌を作詞する宿題が出されていた。応募作品はあまり多くなかったようだが、その中から当時4年生の堀越晋の作品が入選した。国語科主任を務めていた尾崎楠馬が補作作曲し、校歌はでき

いう。当時、作文は独立した1科目であったが、彼は作文でも特別優秀な成績であったということもなかったという。しかし、26歳で夭逝した。

作曲の尾崎楠馬は、高知県の出身で明治40年4月、31歳で着任した。明治44年7月に、青山師範学校への転勤まで、国漢を教授し、寄宿舎の舎監を兼ねた。着任と同時に国漢科主任を命じられた。

東京高等師範在学中は、水泳の選手として活躍し、音楽にも堪能で、オルガンを巧みに弾き、唱歌を好んで歌ったという。また、本校在職中は水上部顧問としても指導に熱心で、明治44年7月には、東京への転勤の直前まで、水泳訓練の指導にあたる。

しかし、この校歌は、戦後しばらく三番が姿を消した。終戦後、民主化を進めるといふ政策のもとで、軍国主義、全体主義的なものはタブー視され、三番の歌詞の一部がこれに抵触するということも、三番は歌われなかったのである。それにしても、本校校歌の三番は、全歌詞の主題をなす部分である。これを欠いた校歌しか歌えなかった当時の生徒たちが、三番の存在を知ってどんな感慨を持ったであろうか。平成9年創立100周年記念事業が準備され、種々の調査が行われる中で、戦後、一部が歌われなかった間に三番が変更されていたことがわかった。

元来は「この秀靈 だったものが、「この秀麗」になり、「東國男兒の氣を享けて」が「血を享けて」、「氣魂」が「氣魄」に変更され、歌詞としては整備されたものとなった。どなたの手によったかは不明だが、昭和30年代に、変更された。

四番の「龜城五百の健男兒」は時代により、生徒数に合わせて読み替えて歌っていたようだ。

尾崎楠馬先生の偉業をたどる

土浦一高（旧制土浦中学）の校歌を作曲された尾崎楠馬（すま）先生が、旧制静岡県立見付中学校（現静岡県立磐田南高等学校）の初代校長を大正11年2月10日から昭和17年3月31日まで勤められたことが分かりました。そこで、先生の偉業をたどるために、12月26日、土浦一高同窓会役員が磐田市を訪れました。

駅から徒歩10分、遠江国分寺跡に隣接して磐田南高校がありました。同窓会館には同窓会長はじめ役員の方々10名がお待ち、お互いに自己紹介ののち、尾崎先生のお話を伺いました。



磐田南高校にある尾崎先生の顕彰碑

尾崎先生は明治11年、高知県のお生まれで、明治33年、高知師範学校卒業後、芸陽高等小学校勤務を経て、東京高等師範学校（現筑波大学）に入学、明治40年3月31日、同校本科国語漢文部を卒業し、同年4月5日、茨城県立土浦中学校に教諭として赴任されました。その後、大正元年に、青山師範学校教諭、大正6年に、浜松師範学校教諭、同校教頭を経て、大正11年、新しく開校した見付中学校の校長として迎えられるました。

尾崎先生は土浦中学の同僚であった小田原勇先生を三顧の礼をもって教頭に迎え、学校づくりを始められました。「学校を自分たちで作ろう」を合言葉に、校長・教頭が先頭に立って、毎日放課後の運動場づくりから校庭の拡張工事・防風堤づくり（現在でも、野球場の外縁として残っており、小田原山と呼ばれる最高

部には、小田原教頭の顕彰碑が建てられていました。・50坪プール建設と生徒と先生が共に労苦を重ねていきました。「土方仕事（そのため、「ドカ中」と呼ばれましたが、後にこれが愛称となりまし）ばかりさせて、勉強をやらせない。」との批判も浴びました。見付中から次々と有名上級学校への進学者が出るに及んで、尾崎・小田原コンビの教育方針が見直されていきました。以後、尾崎先生は見付中学を死に場所と定めて、学校愛・生徒愛に燃えて渾身情熱を傾け、20年におよぶ校長職を全うし、そのまま見付に住みつき昭和29年にお亡くなりになりました。旧正門近くには「尾崎先生顕徳之碑」が建てられ、その建学精神が今でも磐田南高校に息づいています。懇談後、学校近くの見性寺にある先生のお墓に詣りました。先生にはお子さんがおられませんが、近いゆかりの方が、墓には真新しい花が供えられていることが夫妻のお墓を守られていること、墓には真新しい花が供えられていること。

同窓会では、墓への案内の石碑を建て、平成15年に同窓会で行った50回忌法要には、先生の徳を慕う教え子と縁者70余名が焼香してご冥福を祈り、参列できなかった方々284名からも100余万円のご芳志が寄せられたことです。同窓会報「尾崎楠馬先生50回忌特別号」も発行され、そこには、尾崎先生の遺徳を慕う教え子の思いが溢れていました。

母校だより

一高祭がくれたもの 第63回一高祭実行委員長 三年 鈴木 剛志

第63回一高祭が5月29日、30日に開催され、五千人を超える来場者を迎えて、無事成功を収めることができました。この場をお借りして、一高祭にご協力いただいた先生方、地域の方々、そして一年の間一緒に成功に向けて努力してきた実行委員や協力してくれた生徒の皆さんに改めて感謝を申し上げます。

第63回一高祭実行委員会が発足して以来、九つの委員会の委員長を中心に、様々な事柄について議論や準備を重ねてきました。例えば、「光量」というテーマにたどり着くまでには、生徒へのアンケートを基に辞書を片手に数カ月をかけて意見をかわしました。生徒自らが行う予算編成や企画準備が夜遅くまで続いたことも、今では懐かしくさえ思われます。そしてこのような数多くの議論や活動を通して実行委員会だけでなく、一高祭に参加した全ての人たちが一つの輪として繋がったことが一高祭を成功へ導いたのだと確信しています。



一高祭

抜けていきます。思い出ばかりではありません。「何か手伝えることは？」と聞いてくれる友人の大切さを身にしみて感じたり、一方で、180余名の実行委員の先頭に立つ実行委員長としての責任の重さを痛感することもありました。その中で私が得た最も大きなものは、「自信」です。元々人前に出ることさえ苦手であった私が、一高祭の実行委員長になった時は大変悩みました。ですが、大勢の人と話し、一高祭の準備の先頭に立つ中で、実行委員長として自分がすべきことに対して真正面から向き合えるようになりました。一高祭を終えたときの達成感と少しの安堵感はまだに鮮明に覚えています。

私は一高祭を一枚の絵だと考えます。長い間先輩方が積み重ねてきた背景に、私たちが第63回一高祭の新しい色を加えました。それは時を経て色あせるものではなく、なぜならそこには確かに私たちの創り上げた一高祭が刻まれているからです。

最後に、一高祭を通して私達は高く投げたボールの最高点を追い求めてきました。しかし、私達が追ってきた最高点はまだ先にあります。実際、今回の一高祭で改善された点もあれば、反省すべき点もありました。それに立ち向かうのは、今後の実行委員たちです。これからもこの伝統ある一高祭が続き、後輩達がその最高点を追い求めてくれることを心から願っています。

歩く会を振り返って

第四十二回歩く会実行委員長

二年 寺島 怜志

今年も昨年に引き続き、新たなコースを作成するため、一月から準備委員会を発足し、活動してきました。今年のコースは、かすみがうら市水族館をスタート

ポイントとし、あじさい館、霞ヶ浦環境科学センター、櫻の木公園を通り、川口運動公園をゴールポイントとする出島の魅力が満載のものとなりました。また、今年も踏破証を作成しました。その踏破証には、葉係長である横山君の詩を掲載しました。こちらにも掲載いたします。

鳥が躍り上った高みには
天空の崖はなかった。
光と風と朗らかな空は
微笑みながら逃げて行った。

遠く曖昧な天蓋は
沸騰を閉じ込めた躍動的な
地殻を溶かすように蔽って
天と地が最も美しく安定する
妙なる平衡の瞬間の激情を
知っているのだろう。

黄金色した枯葉一筋
静かに落ちて草木が震える。
萎びて乾く穂首のすがたは
さながら猛る怪鳥の首だ。

秋の終末という名の有機質
激情の沸騰を閉じ込めていた
天蓋の下情熱の狂宴が
眼前を踊り渡る日には
定めて太陽の緩慢な奏でが



歩く会

めくるめく印象となる。

最後になりましたが、実行委員会の皆さん、様々なところで協力してくださった先生方、そして委員会の活動をサポートくださった市川先生にこの場をお借りして一言お礼を言いたいと思います。ありがとうございました。

文化講演会

映画監督 中村義洋氏(高四十一回)

「映画を作るといふ仕事」

教頭 稲葉 裕一

十一月十八日(木)に、本校体育館に於いて、「チームバティスタの栄光」「ゴールデンランパー」等の代表作で知られる映画監督の中村義洋氏を講師に迎え、文化講演会が行われました。氏は、全生徒、保護者等、約1,100人の聴衆に向かい、一高祭の時に仲間と筒井康隆の小説を劇にして上演したことを、受験勉強の合間に、「マルサの女」を100回以上見たこと等の高校時代の思い出を、ご自身の高校生時代の苦悩を交えながら、率直な言葉で語り始めました。

大学に進んでから、自分でも映画を作るようになり、「五月雨厨房」という作品が1993年の「ぴあフィルムフェスティバル」で準グランプリを受賞した時のこと、崔洋一監督の助監督になった時のエピソード等が披露されました。「助監督時代の経験が今の仕事にどれだけ役立っているかわからない。いいスタッフ、いいキャ



映画監督 中村義洋氏

ストに恵まれれば、いい映画はできる。監督には映画製作に関わる人間を結びつける人間力が必要になる。助監督は撮影の段取りをする。撮影日時に合わせて、必要なものをすべて揃える。コミュニケーション能力が必要になる。」という興味深いお話もして頂きました。

2007年に映像化不可能と言われた「アヒルと鴨のコインロッカー」の監督をし、認められ、「新藤兼人賞」を受賞した時のこと、「チームバティスタの栄光」のキャストイングのお話等の後、「各場面の登場人物があたかも初めてそのせりふを言い、相手役が始めてそのせりふを聞いたような映画を作らなければいけない。」という映画作りにかける熱い想いを教えて頂きました。

最後に、「人と人との出会い、偶然と偶然の積み重ねを大切にしたい。」という生徒へのメッセージで講演を締めくくりました。

職員室だより

保健体育科より

主任 吉井 宏之

新体育館が完成し、同時に教官室が引越してから早くも7年の月日が経ちました。その間、我々保健体育科は、長年お勤めいただいた先生方がご退職、ご転勤なされ、メンバーの入れ替わりが激しく、赴任5年目を迎えた私(硬式野球部顧問、2年担任、教務部)が最も古株となつてしまいました。黒沢信行(バスケットボール部顧問、1年担任、生徒指導部)、飯塚敬史(サッカー部顧問、3年担任、生徒指導部)の両名は3年目を迎え、指導にも熱が入っております。昨年は中根宣子(陸上部顧問、生徒指導部副部長)を迎え、さらには今春、新規採用として山野辺薫(陸上部顧問、教務部、保健部)、定時に小神野文彦(専門科目少林寺拳法)を迎えました。また新規採用者が配属になったこともあり、今春本校定時制を定年退職された光野修一(専門科目ラグビー)、昨年度に引き続き大学院生の浜上洋平(専門科目水泳)の2名が非常勤講師として勤務しております。

た授業はそれぞれの技能向上だけでなく、日々の勉強で疲れた心身を、スポーツ活動によってリフレッシュし、活力を生み出すためにも大切な役割を担っていると考えております。

保健の授業においては、課題学習に重点を置き、1年次は個人、2年次はグループでの研究を行います。健康を様々な側面からとらえ、生涯の健康に役立つ情報を収集する能力を養っています。さらには、自分の身体に関する知識を増やすことで、命の大切さや自己愛、思いやりの心を育てよう、と医学、解剖学、運動生理学的な見地からの内容も授業に活用しております。

運動部活動においては近年、陸上部が関東大会、国体に出場、サッカー部や男子バスケットボール部が県大会のベスト4に進出するなど、文武両道を掲げる本校において優秀な成績を収めております。限られた時間の中で工夫を大切に、効率よく中身の濃い練習を継続することによってさらなる活躍を目指し、切磋琢磨したいと考えております。

今後授業のみならず体育的行事や運動部活動など、積極的に生徒と汗を流し、学校をリードできる保健体育科でありたいと考えております。

部活動報告

生徒指導部

照 沼 裕 一

日頃より本校の部活動に対しまして、ご理解とご支援を賜り有難うございます。本校の部活動とその他生徒の活動についてご報告いたします。

今年度の部活動加入の割合は、

表 (数字の単位は%、4月現在)

Table with 3 columns for years (1 year, 2 years, 3 years) and 2 rows for gender (male, female) for each year. Rows include 運動部, 文化部, 小計, 学年, and 全体.

表に示したとおり各学年、全体共に7割から8割となっております。この数字は、例年どおり特筆すべきもので、多くの生徒たちが勉強だけでなく、運動や芸術、文化的活動などに積極的に参加していることは、生徒会本部顧問としてうれし限りです。また、部活動以外でも、一高祭実行委員(本年度約100名、5月29日、30日・来校者数約5400名)、一高オリンピック実行委員(約50名、9月10日)、歩く会実行委員(約50名、10月8日)と三大行事においても生徒の積極的参加が見られ、各行事も、充実したものになりました。さて、部活動の加入については先ほど示したとおりですが、今年度も昨年度にひきつづき、各部活動の活躍が顕著になっております。本年度これまで主な実績について挙げてみます。

水泳部

平成22年度関東高等学校水泳大会茨城県予選大会
男子100m自由形 第1位 森田夏広
男子200m自由形 第2位 森田夏広

- 400mメドレーリレー 第3位 県春季水泳競技大会
200m平泳ぎ 第1位 橋本圭太
関東高等学校水泳大会 出場
男子1000m2000m自由形 森田夏広
男子1000m2000m平泳ぎ 橋本圭太
男子400mリレー、800mリレー、400mメドレーリレー
三島大地、小田研人、市川裕志、高崎稜、齋藤敬、金子雅典、成田琢磨、阿倍仁
平成22年度関東高等学校水泳大会
男子100m自由形 第5位
男子200m自由形 第8位 森田夏広
平成22年度全国高等学校総合体育大会に出場 森田夏広
第65回 国民体育大会 少年男子A
100m自由形 第7位 森田夏広
第65回 国民体育大会 少年男子A
平成22年度全国高等学校囲碁選手権茨城県大会
女子団体戦 優勝 谷口晴香、松木奈織
男子団体戦 第3位 島崎弘平、中川悠一、吉村秀行
男子個人戦 第2位 島崎弘平
女子個人戦 第3位 谷口晴香
第34回全国高等学校囲碁選手権大会に出場
女子団体 谷口晴香、松木奈織、飯田穂菜
男子個人 島崎弘平
第34回全国高等学校総合文化祭囲碁部門 茨城県代表 吉村秀行、中川悠一
陸上部
第63回関東高等学校陸上競技対校選手権大会茨城県予選会
男子走幅跳 第1位 西村智宏
男子三段跳 第2位 刈田浩平
男子三段跳 第1位 刈田浩平
第63回関東高等学校陸上競技対校選手権大会
三段跳 第7位 刈田浩平
走幅跳 第8位 西村智宏
第65回 国民体育大会
走幅跳 第1位 西村智宏
少年男子B 走幅跳 第6位 西村智宏
県高校陸上競技新人大会
走幅跳 第1位 西村智宏
関東高校陸上新人大会出場
走幅跳 西村智宏
第34回全国高等学校総合文化祭管弦楽部
弦楽部
第34回全国高等学校総合文化祭管弦楽部



夏の高校野球の応援



水泳部 森田夏広君(沖縄・水泳競技会場にて)

門 出場
演劇部
関東高校演劇サーマーフエスティバル 出場
写真部
関東高等学校写真展東京大会
奨励賞 丹治 蓮
など、運動部では全国総合体育大会(インターハイ)をはじめ、関東大会や国民体育大会に、文化部では、文化部のインターハイである全国高校総合文化祭(総文祭)に多くの生徒が参加しています。特に、水泳部の森田君と陸上部の西村君は、いずれも国体で入賞しています。勉強だけでなく、全国レベルの大会でも活躍できる力があるということは、他の生徒の励みにもなるものだと思います。また、夏の高校野球選手権大会においては、土浦市営球場の応援大賞をいただきました。全校生徒がまとまった応援を見せてくれました。部活動や諸活動は、学生の本分である勉学との両立が求められ、健全な心身の発達やコミュニケーション能力の向上などに欠かすことのできないものです。生徒たちが自らの成長のため、安全に十分な力が発揮できるよう努めてまいります。今後とも、ご指導の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成二十二年入試報告
東大・京大・東工・一橋44名
 東大24名でV字回復す
 筑波大は42名で全国1位
 進路指導部長 門井 了

平成22年度入試は、センター試験が前年度に引き続いて難化し、国立大出願にあたって第一志望を貫くか否かの決断を迫られる厳しい入試となりました。

志願者数は、約73万4千人（前年比99・7%）、現役志願率（センター試験現役生志願者数/高等学校新規卒業生数）は、昨年度過去最高の40・4%とはじめて4割を越えましたが、今年はさらに0・5ポイント上昇して41・0%と記録を更新しました。

難化したセンター試験ですが、志願者数は昨年度より約9千人多い55万3千368人（前年比101・7%）、実受験者数は約1万3千人多い52万6000人（前年比102・6%）でした。

大学入試センター発表によると、平均点が昨年度より大幅に下がったのは、数学ⅠA、国語、物理Ⅰ、化学Ⅰ、政治経済で、06年度導入以降年々難化していた英語リスニングテストは29・39点（4・1点増）と平均点がアップしました。

900点満点の平均点は、文系7科目が54・5点（昨年55・2点）、理系7科目54・2点（昨年56・9点）で、文系が7点、理系が27点下がりました（河合塾のリーサルによる）。本校生の平均点

も、文系が65・5・8点（昨年比20・9点減）、理系が64・4・4点（昨年比31・3点減）と下がりましたが、文系720点以上得点者が32名、理系700点以上得点者が78名で、全国の有数公立校と充分に競える結果でした。

今春の入試結果について、主なもの挙げてみます。

- 1 東京大学24名（新卒14名）
 - 2 京都大学4名（新卒3名）
 - 3 東工大学5名（新卒4名）
 - 4 一橋大学11名（新卒6名）
 - 5 東北大学15名（新卒10名）
 - 6 筑波大学42名（新卒35名）
 - 7 国立大医学科9名（新卒1名）
- 東大は昭和63年度入試以来続いていた20名台を回復しました。地元筑波大は、新卒生が後期合格16名と奮闘し、全国1位の座を奪還しました。

国立大医学科は一桁でした。今年の新卒生進学率（すべて4年制大学）は52・0%でした。この10年間の進学率の推移を見ると、17年度と19年度を除いて、50%台で推移していますから、例年通りの進学率と言えます。志高く果敢に挑んだ受験の結果であり、もう一年かけて納得のいく大学に進学する、本校はそういう生徒たちの集まった学校だということの意味します。

本校を取り巻く環境も年々厳しくなっております。しかし、職員一同、優秀な生徒を教えられたいという喜びを持って、将来にわたって伸び続ける生徒の育成に尽力したいと考えております。ご支援よろしくお願ひします。

平成22年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

大 学	合格者	新 卒
北海道大	6	1
岩手大	1	1
東北大	15	10
茨城大	12	8
筑波大	42	35
群馬大	2	
埼玉大	1	
千葉大	9	5
お茶の水女子大	5	4
電気通信大	2	
東京大	24	14
東京医科歯科	1	
東京外語大	5	4
東京芸術大	2	1
東京工業大	5	4
東京海洋大	1	
東京農工大	4	2
一橋大	11	6
横浜国立大	6	1
新潟大	2	
富山大	1	
山梨大	2	1
信州大	1	

大 学	合格者	新 卒
浜松医科大	1	
名古屋大	2	
京都大	4	3
大阪大	2	
神戸大	2	
九州大	1	1
宮崎大	1	
国際教養大	1	1
会津大	1	
茨城県立医療大	2	2
高崎経済大	1	1
首都大東京	5	2
横浜市立大	1	
大阪府立大	1	1
国公立大計	185	108
(うち医学科)	9	1
防衛大	3	2
大 学 校 計	3	2

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	24	15
学習院大	11	6
慶応大	51	22
国際基督大	8	8
上智大	22	10
中央大	45	14
津田塾大	6	3
東京女子大	11	4
日本女子大	15	10
東京理科大	88	44
明治大	78	37
立教大	53	30
早稲田大	105	50
法政大	33	17
北里大	9	5
芝浦工大	15	9
日本大	13	4
同志社大	5	2
立命館大	10	2
その他	82	46
私立大計	684	338
合格者総数	872	448

平成21年度 進修同窓会決算書

収入総額 一金 12,348,393円也
支出総額 一金 11,557,893円也
差引残高 一金 790,500円也 (平成22年度へ繰越)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 寄付金, 雑収入, 合計, and 寄付者名.

【収入】 (残額欄のΔは決算額が予算額を超過していることを示す。)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額, 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 予備費, 合計.

上記のとおり決算しました。

平成22年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成22年3月31日

監事 熊木 士郎 印

監事 田嶋 栄吉 印

平成22年度 進修同窓会予算書

収入総額 一金 12,301,000円也
支出総額 一金 12,301,000円也
差引残高 一金 0円也

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 雑収入, 合計.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 予備費, 合計.

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

平成22年4月11日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

磐田南高同窓会会長が来校

去る七月二十一日、静岡県立磐田南高等学校同窓会の山下六機会長が校井孝順副会長を伴って、本校を訪れた。本校の校歌作曲者 尾崎桐馬先生が、同校の初代校長であることが昨秋わかり、十二月二十六日、先生の本校離任後の動向を知るために旧本館活用委員会 大曾根委員長と飯村副委員長、上木、松井、鈴木の各委員が同校を訪問した。

このことへの返礼と創立百周年を迎えるに当って、本校の創立百周年記念事業がどのように実施されたかお聞きしたいとのことであった。
旧本館前での写真撮影、校歌碑の見学の後、同窓会室において、大曾根、青山、長瀬の各副会長、上木、飯村、小泉の各事務

会費納入のご協力とお願い

平成二十一年度の会費納入状況は、平成二十二年三月末現在二、四五四名の皆様から、八、〇五八、〇〇〇円を頂きました。今

編集後記

土浦一高生の米国研修が実施されました。2010年3月19日から11日間亘って東海岸を中心に、米国を代表する施設を訪れ見聞を広めました。詳細は本号別記に記載されていますが、充実した研修に加えて、領事館、企業、大学等での活躍された在米の本校卒業生による協力で、ボストンでの米国見学、ワシントン在米大使館訪問と講義などが実現し、予想以上の内容の濃さと生徒たちも大感激でした。尽力いただいた渡邊慎一氏(高20)はじめ関係の皆様には謝意並びに敬意を表します。

◇取材で同窓会前会長の幡谷祐一氏にお目撃した折、氏の著書「学・先人の訓」を頂戴しました。中に佐藤一斎著「言誌」の一節が冒頭に引用されており、壮にしてにして學ばば壯にして為すあり、壮にして

局担当本部幹事が参加して、記念事業の内容、募金活動などについて、約一時間懇談した。また、これとは別に、同日同校の進路担当教員二名も来校し進路指導について学校側と話し合った。磐田南高が身近に感じられた一日であった。

土浦一高
電話 〇二九一八二一〇一三七
FAX 〇二九一八二六一三五二一
ホームページアドレス
http://www.tsuuhua1-h.ed.jp

年度も納入していただきたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費(生徒の諸活動の奨励、旧本館活用等含む)に充てられます。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

学べば老いて衰えず、老いて學べば死して朽ちず。86歳で博士号をとられた幡谷氏の座右の銘のことですが、生涯の座右の「学ぶ」ことの意味を我々後輩も、改めて考えさせられた次第です。
◇発行に際し多方面からご協力を頂き厚く御礼申し上げます。進修同窓会発展のため、今後とも尽力をお願いいたします。
発行日 平成二十二年十二月一日
進修同窓会会報67号

- 会報編集委員会
編集委員長
編集委員
校内
浅田 豊宇 鈴木 山三 谷富 長木 青田
野崎 川木 越田 輪中 永瀬 島山
武利 仁志 隆志 良道 宗幸 和一
雄明 郎郎 博士 郎雄 也男 夫義